

## 巻頭言

この一年の行事を振り返ります。

国際学会が2件ありました。6月には錯体化学国際会議（シンガポール）、9月にはAPCIL（オーストラリア）に参加しました。学生を連れていくには費用対効果の考慮が必要ですし、教員にとっては通常業務に加えて準備・発表指導が相応の負担となります。しかしながら、今回は参加した学生の経験になった上、上田君がポスター賞を受賞し、私の口頭発表も聴衆から反響がありました。内外の著名な研究者に錯体系イオン液体をPRできた点でも有意義でした。

8月には「錯体化学夏の学校」（千葉）の講師を務めました。150名もの参加があり、幸い大変好評だったようで、懇親会も盛況でした。講演は、単なる成果発表ではなく、大学院生の発見と工夫の足取りを紹介するスタイルを取りました。最後は「一生感動、一生青春」という相田みつをの名言で締めくくりました。今回は、自分の恩師の菅原先生とともに講師を務めるという立場になり、若干不思議な感じもしました。時がたつのは早いものです。私も院生の時に、「夏の学校」に出たことがあります。その時、相当にインパクトある発表をされた先生がおり、感銘を受けた思い出があります。今回の私の講演後、錯体系イオン液体の研究に大変興味を持ったという声が多数あったのは、とても嬉しく思いました。私からは「機能性液体の研究はとても面白いですが、難しいですよ」と忘れずに付け加えました。実際問題として、液体は合成・精製がしにくい上、結晶構造解析ができず、構造的な議論に欠ける、という難しさがあります。さらには、旧来の錯体化学・物質科学のメジャーな領域とはかけ離れた「新領域」であるが故の様々な困難があります。しかし、如何なるメジャーな学問分野も最初は新領域であったはずで

9月には、学内でイオン液体ミニシンポジウムを開催しました。奈良女子大の飯田先生、卒業生の舟浴博士、堀越准教授、そのほか学内外の主要な共同研究者にご参集いただきました。私も今後の研究展開を整理する良い機会となりました。有りがたいことです。

この一年、私の方は化学教育部会長を務めましたが、この関係で若干ややこしい雑務がありました。他にも各種の報告会、セミナー等があり忙しい日々です。教員にも年俸制が一部導入され、個人評価があります。研究室では、今年度も篠田先生の日本語の論理構成講座、樋口先生のアイデアマラソンセミナー、新田先生の英語講座など、いろいろな先生方にお越しいただき、ご講演をいただきました。感謝です。

3月末の化学会の会期中には、卒業生が集まりを企画してくれ、現メンバーも交えて歓談の機会を持つことが出来ました。卒業生の近況や、在籍当時の思い出話等々、話の尽きる間がなく、15年前、同じ日大船橋の年会会場で発表したメンバーもいて、感慨深いものでした。卒業生全員に幸あれと祈ります。

(2015年3月 持田)